

生かされて 低くされて

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。フィリ^ピ 2:6.7.8

主から あわれみと ゆるしを

いただき 今を生かされて

いることを 感謝いたします。

共に祈りあって

主のために 残る人生の

一日一日を 御名を呼びつつ

生かされてまいりたいです。 C・M

こんな小さなメモのようなお便りをいただいて、キリストに生きるとは、そうか、このような低さに生きることなのかと、心に花が咲いたように喜びが広がった。

今こうして生かされている、これは、決して当たり前のことではないのだ。今日生かされていることを喜び、感謝する者だけが、死ぬ日にも(それがたとえ思いがけない災害や、事故、病気であろうと)、素直に「ありがとう」と言って死んでいけるのだらう。なぜなら、私たちの命は神のものであり、私たちは神によって生かされ、すべては神の御手の中にあるのだから。

キリスト者をこのような低さに導くのは、「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順で」あられたキリストの御姿であり、何よりも、全人類の罪を贖われた‘十字架の力’そのものであらう。

キリストの十字架によって赦された喜びが、

どうか 今日を生きる力であるように。

今も共にいてくださる聖霊が、

今日も神と人ともに仕える 低き道へと導いてくださるように。

「天の雲に囲まれて来る」と言われたキリスト再臨の日が、復活の朝が、

何よりの、唯一の、真の希望であるように。

「低くされて」

今日は善い日だった。こんないい日は、人生にそう多くはないだろうと思うほどいい日だった。今日をこんなに善い日にしてくれたのは、何とも素敵な組み合わせの二人だった。その一人は、愛おしい義母。4月に入って、いつ行っても眠っていて、それでも起こして食事介助をしようとしても飲み込みが難しい。少し目を開けてもすぐ閉じる。これではこの穏やかな生活も長くは続かないだろうし、往診医からの説明を待つばかりだと思っていた。

ところが今日、母のスケジュール表では「リハビリ PM1時から」となっているが、まさか、眠ったままの母がリハビリを受けられるとは思えず、もし来てくださっても「眠っておられますね」と言って、帰って行くのだろうと思っていた。ところが1時きっかりに現れた好青年、理学療法士のNさん。「いえいえ大丈夫ですよ。リハビリを始められて、この頃では歩いておられますよ。眠りが深い時はあぶないので歩きませんが、時々目を開けられるようなら大丈夫」と言われたかと思うと、優しく声をかけながら、血圧測定、検温と手際よく進め、まず足の先から膝、太股とマッサージしながら、関節を曲げ、その度に「宮田さん、いいですよ。素晴らしい」とほめてくださる。母は時折目を開け、それでもNさんにすっかり信頼しているのだろう、何か言われる度に頷いている。そしてついに、「では歩きましょう」ということに

なり車椅子で移動、廊下を本当に歩き始めたのである。Nさんが体を支えてくださり母は腕を預けて、うれしそうにNさんを見上げ、一步一步と真っ直ぐに立って。

こんなことがあるだろうか、私は「老いるって何て悲しいことか、自分で何もできなくなって、終いには食べ物を飲み込むことさえできなくなって…」と、母が可哀想でしようがなかったのに、Nさんは、今日母が生きていることを喜んでくださり、関節が固まってしまわないように、今出来ることをしていてくださる。何の機械も器具も使わず、ただ自分の手と体全体を使って腫れ上がった母の足をもんだり、抱えたりしていてくださる。「これからどうなるのだろう…いつまでこんな日が続くのだろう…」と思い煩えば、母はただ可哀想で惨めな存在にすぎないけれど、「いいですよ。そう、素晴らしい。さあ、もう一度」と優しく声をかけ続けるNさんの姿は、決して惨めな人を哀れんでいるのでも、長く生きるための治療をしているのでもない。今できることを精いっぱいしながら、ありのままの母と、母という一人の間と向き合っていてくださるのだ。

これだと思った。人が人を愛するとはこういうことだと思った。

眠っていても、ふと目を開けて、目と目が合うと花のような笑みがこぼれる母。

私だけではない、介護をしてくださるある方(その方も青年)が、「目が合って、微笑んでくださると、もう、最高です。その笑顔にいやされるんです。」と仰ってくださいました。その笑顔を失いたくないとせつに願うけれど、でも、母がまったく食べられなくなっても、胃ろうや高カロリーの点滴を望みはしない。一人での生活が難しくなって、住宅型老人ホームで暮らすようになって6年。一言の愚痴も言わず、いつ行っても穏やかに迎えてくれる母だが、「食べたくないの?」との質問にさえ「わからない」と辛そうに答えるようになって、おそらく、私の想像などはるかに超える忍耐を重ねてきたのだろう。その忍耐によって、母のこの笑顔は守られるのだと思うと、思わず「ありがとう」と涙ぐんでしまう。

私はこの母をとおして、人は愛してこそ真に価値ある者となるのだと教えられた。存在そのものに意味を与えるのは、愛なのだ。そして、人は生きている限り、老いることも、病むことも、低くされるという意味での絶えざる成長を続けているのだと。

いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。

福音 No.311 2014年4月

パウロの言葉によって

聖書の言葉の解説は聖書の中にある、と聞いたことがあるけれど、福音書に記されたイエス様の言葉を、そのまま具体的に生きたのがパウロであって、だからこそパウロの言葉はイエス様の言葉の何よりの解説となっている。

☆「悔い改めよ。天の国は近づいた」マタイ 4:17

とは、イエス様宣教の最初の言葉であるが、「悔い改め」とはいかなるものか、パウロの体験がその本質を教えてくれる。

★さて、サウロ(パウロ)はなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの

光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。

悔い改めとは、復活のイエス様に出会って方向転換させられること。自分の信念を木っ端みじんに砕かれて、イエス様に従う者とされること。自分中心(人間中心)からキリスト中心(神中心)の人生に変えられること。

☆「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」マタイ

5:3

ここでイエス様の言われる「心の貧しさ」とは何なのか、次のパウロの告白が深く語っている。

★わたしは肉の人であり、罪に売り渡されています。わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。

……わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれ

がわたしを救ってくれるのでしょうか。ロマ書 7:14～24

自分はどうしても正しく生きられない者である、にもかかわらず、自分の正しさを主張せずにはおられない者である、という自分の罪に打ちのめされて、「だれがわたしを救ってくださるでしょう」と叫ぶ人、救いを求めずにはおられない人。

☆だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。マタイ 6:24

とイエス様は言われた。

パウロは自分のことを「キリストの奴隷」と言っている。手紙を書く時、自分はキリストに仕える者であると、まず宣言する。神と富(この世の力)が決して相容おれないものであると、パウロの生き生きした言葉は、今も私たちに語りかける。

★わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それを塵あくたと見なしています。フィリピ 3:7~8

この世のものが輝いて見える時、私たちはまだキリストのものではない。キリス

トに仕えることだけが、わが刻々の喜びとなるようにと願わずにはおられない。

☆だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。マタイ

6:31～33

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」というイエスさまの御言葉を実践すると、こうなるのだなあと、パウロの言葉が見事なまでに教えてくれる。

★わたしは、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです。貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能で
す。フィリピ 4:11～13

このパウロのように「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です」と言えないから、日々、さてどうしよう、私が生きていくには、あれもこ

れも必要ではないかと思ひ煩いフーフー言っている。でも、でも、現実の自分がいかようであれ、御言葉を信じ、神を神として生きるなら、必ず勝利の道は開かれる。先日ある歌集をみていて「境遇に和解し 生活に勝利しよう 舗装された道に タンポポ」という歌を見つけた。このパウロの言葉を思つて詠んだ歌のような気がして、なつかしかった。

☆イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。ヨハネ 11:25

この御言葉が真に力を発揮するのは、死に直面した時だとパウロは告げる。

★わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました。わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました。2コリント 1:8～9

この神なき世にあつて、神様を信じて生きること。それ自体が戦いであつて、戦わずしてキリスト者であり続けることなどできないのだと、パウロの言葉を読みな

がらつくづく思う。だからこそ、「キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようになさい」というパウロの忠告を良く聞いて、さあ、今日も命の御言葉を抱きしめて生きていよう。